

令和元年5月29日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02368

研究課題名(和文) 写真家ウォーカー・エヴァンズとモダニスト文学者との学際的比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Walker Evans and the Literary Modernists

研究代表者

山本 裕子 (Yamamoto, Yuko)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：80545377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：写真家Walker Evansとモダニスト文学者との相互影響関係を探るという研究目的を達成するために、アーカイブ調査において、コンタクト・プリント、所蔵本、手紙、ポストカード等を精査することにより、これまで明らかになっていない事実を掘り起こし、新事実に基づいて雑誌作品を分析した。写真家の視覚表現とモダニスト文学者の活字表現との影響関係を実証することにより、視覚文化と活字文化の交渉の一端を照射した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的社会的意義は、二点である。第一に、アーカイブ資料に基づく研究手法によって、完成作品だけでなく、その生産過程、分配、販売といった過程を含めて、研究した点である。第二に、これまで適切に評価されてこなかった二人の雑誌掲載作品を研究対象に据え分析することで、新たな作品評価に繋がった点である。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to prove the mutual influence between the photographer Walker Evans and other Modernists. Using previously unknown facts found in archival research, this study offered new readings of many undervalued magazine works by Evans, Faulkner, and Hemingway.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：写真 米文学 Walker Evans William Faulkner Ernest Hemingway ドキュメンタリー

1. 研究開始当初の背景

(1)

研究代表者は、近年、モダニズム文学と写真との学際研究に取り組んできた。「アメリカのフォト・ジャーナリズムとモダニズム文学」(平成23年度、京都ノートルダム女子大学学内助成個人研究)および「フォト・テキスト研究 ―米国モダニズム文学とドキュメンタリー写真の交差」(平成24~26年度、日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B))において、米国における30年代および50年代におけるフォト・ジャーナリズムとモダニズムとの相互発展を明らかにしようとした。研究調査を進める過程で、「ストレート・フォトグラフィ」の旗手と目される一方で「モダニスト」とも称される写真家 Walker Evans (1903-1975) とモダニズム文学者との間に、これまでほとんど知られていない協働関係があることに気づかされた。

(2)

当初は小説家を目指していた Evans のキャリアの展開は、同時代人であるモダニスト文学者との協働の積み重ねであると言える。パリで仏語と仏文学を学び、帰国後、ニューヨークにて、e. e. cummings や William Carlos Williams らボヘミアン芸術家達と交流していた。そうした交友関係から、そして父親同士が知り合いであった縁もあり、1929年、Evans は、Black Sun Press 社から出版された Hart Crane の詩集 *The Bridge* に三枚の写真を提供している。1933年、*The Crime of Cuba* の写真撮影のためキューバを訪れた Evans は、Ernest Hemingway と3週間にわたって交流する。2004年、Hemingway が常連であったキー・ウエストのバーから、Evans 撮影による40数枚の写真が発見されており、Hemingway が Evans の写真を保管していたことが判明している [Coralie Carlson, Associated Press (April 11, 2004)]。1948年、Vogue 社の委託により Evans はミシシッピ州に向かい、Faulkner の虚構世界を体現する写真を400枚超撮影している。

(3)

一方、Hemingway は、キューバ体験に基づいて、短編“*One Trip Across*” (1934)、“*The Tradesman’s Return*” (1936)を書き、後に長編 *To Have and Have Not* (1937)として纏めており、こうした作品と Evans のキューバ写真との比較研究は、早急に手をつけねばならない課題であると思うに至った。また、Faulkner も、Evans の一枚の写真から着想を得て、短編“*Sepulture South: The Gaslight*” (1952)を執筆しており、彼の写真とモダニスト文学者の作品との相互影響関係を実証する研究が必要であると考えに至った。

(4)

これまでの批評的欠落は、視覚表象と活字表象とを同列に比較検証する学際的視座の必要性を示している。なぜなら、Evans 評価にみられるリアリズム/モダニズムの揺らぎは、写真研究と文学研究の分野の垣根をあらわしているからである。写真研究者は、「ストレート・フォトグラフィ」という範疇において彼の作品を捉え、一方の文学研究者は、James Agee との合作 *Let Us Now Praise Famous Men* (1941)との文脈においてのみ Evans に言及するがために、彼をモダニストとして捉えてきた。研究代表者は、本研究において、写真研究と文学研究という分野の懸け橋となる学際研究に先鞭をつけることを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀アメリカを代表する写真家 Walker Evans とモダニスト文学者との相互影響関係を実証することであった。これまで文学・写真研究者双方から看過されてきたが、Evans のキャリアは、同時代のモダニスト文学者達との共作あるいは関連作品によって彩られている。こうした繋がりを軸に、アーカイヴ調査において、コンタクト・プリント、所蔵本、手紙、ポストカード等を精査することにより、これまで明らかになっていない事実を丹念に掘り起こし、そうした新事実に基づいて実証的に作品を分析することを目指した。こうした基礎的研究により、Evans の「ストレート」な視覚表現と「モダニスト的」活字表現との影響関係を実証することにより、視覚文化と活字文化との壮大な交渉のごく一端を照射しようとした。

3. 研究の方法

4年間の研究期間においては、写真家 Walker Evans とモダニスト文学者との相互影響関係を探るという研究目的を達成するために、Evans と Hemingway、Evans と Faulkner に焦点をしばって検討した。完成品としての作品だけでなく、一次資料を用いて作品生産過程を比較することにより、相互影響関係を実証的に論証するという手法を用いた。具体的には、Evans と Ernest Hemingway の1930年代キューバにおける活動に注目し、Evans の Cuban portfolio が“*One Trip Across*”に与えた影響を探った。Evans と Faulkner については、50年代前後における二人の雑誌上での活動に注目し、これまで適切に評価されてこなかった二人の雑誌掲載作

品を研究対象に据えた。

4. 研究成果

以下、本研究課題の成果のうち、国外の研究にインパクトを与えられる主要ものに絞って、その概要を説明する。

(1)

国際共著論集に *Faulkner and Hemingway* に収録された論考（図書）は、Hemingway の短編“*One Trip Across*”（1934）と Faulkner の短編“*Sepulture South*”（1954）について、いずれも Evans の写真が創作の源泉となっている可能性を紐解き、前半においては、Evans が Hemingway に渡した未発表ポートフォリオと“*One Trip Across*”にみられる映画的視覚描写との関係を、後半においては、Faulkner の手に渡った Evans の一枚の写真と“*Sepulture South*”にみられる静止写真的視覚描写との関係を分析した。そこから、二作家の「視覚的描写法」（visual aesthetic of writing）を導き出し、比較考察したものである。この論考のベースとなる成果は、サウス・イースト・ミズーリ州立大学フォークナー・センター主催の国際学会 *Faulkner and Hemingway* および日本ヘミングウェイ協会での発表（学会発表）である。

(2)

国際学会発表“*When Faulkner Was in Vogue: Modernism and Women’s Magazines at the Midcentury*”（学会発表）は、1929 年から 1962 年の間における *Vogue* 誌における Faulkner 受容について考察したものである。時代ごとに、書評、エディトリアル、特集として取り上げられるセクションが異なることを、Faulkner の印刷文化における需要の変遷と結びつけながら論じた。とりわけ、最初の特集記事（Evans のフォト・エッセイ“*Faulkner’s Mississippi*”（1948）が重要なターニング・ポイントとなっていることに言及した。本発表を基に執筆した論文は、現在、海外ジャーナルに投稿中である。

(3)

国際学会発表“*On Common Ground: The Cartographic Imaginations of William Faulkner and Walker Evans*”（学会発表）は、Viking 社から出版された *The Portable Faulkner*（1946）を接合点として、Faulkner と Evans の地図的想像力を比較したものである。具体的には、*Portable* に掲載された Faulkner の手書きに基づいた地図および Evans 所有の同本の地図の隣頁の書き込みから、それぞれ *Portable* 編纂者の Malcolm Coley の意図とも比較しつつ、いかなる地図的想像力が見出されるかを論じた。今後、論文化を進め、海外ジャーナルに投稿する。

以下、本研究課題の成果のうち、国内の研究にインパクトを与えられる主要なものに絞って、その概要を説明する。これらの成果は、当初よりもより広い射程を有する派生的な成果である。

(4)

日本アメリカ文学会の全国誌に掲載された論考「『失われた世代』の戦争神話—Faulkner, *Soldiers’ Pay*, 戦後印刷文化—」（雑誌論文）は、Faulkner の「負傷兵ペルソナ」を再考することによって、「失われた世代」の戦争神話を創出した戦後印刷文化のダイナミズムの一端を明らかにした。具体的には、軍服写真、手紙、*Soldiers’ Pay* の分析から、傷痕勇士のペルソナと「失われた世代」の喪失の言説との関係を論じ、敷衍して英米印刷文化におけるモダニズムの戦略を論証した。

(5)

日本ウィリアム・フォークナー協会の全国誌に掲載された論考「移動性の法則—スノーブス三部作と地理的想像力—」（雑誌論文）は、Faulkner のスノーブス三部作を取り上げ、登場人物にみられる移動性（mobility）を鍵概念に、辺境フレンチマンズ・ベンド、小都市ジェファソン、大都市ニューヨークの地政学的関係を考察した。とりわけ、土地との換喩的機能を担う登場人物 V・K・ラトリフとリンダ・スノーブス・コール に注目し、ヨクナパトーフアと大都市との交流を描いているフォークナーの地理的想像力を捉えた。

(6)

日本アメリカ演劇学会の全国誌に掲載された論考「フォークナーのドラマトウルギー—『操り人形』から『尼僧への鎮魂歌』へ—」（雑誌論文）は、Faulkner の『操り人形』と『尼僧への鎮魂歌』を取り上げ、第一節では、『操り人形』の手製本という独特の形態に注目し、その前衛芸術性とフォークナーの作劇術を論じ、第二節では、『尼僧への鎮魂歌』の特異な混成形式に注目し、その実験性と作劇術を考察した。前者はフォークナーに詩から小説への転換を、後者は芸術ジャンルを横断する新しい自伝的形式の構想をフォークナーにもたらしたと結論づけ、フォークナー文学の展開に作劇が果たした役割を明らかにした。

(7)

国際学会発表“Hemingway and Faulkner at War: On Homecoming and the Persona of a Wounded Soldier”(学会発表)は、Hemingway の *In Our Time*(1925)に収録された“Soldier’s Home”と Faulkner の *Soldiers’ Pay*(1926)における帰還兵の人物造型と虚構写真の機能に注目して、二作家の「幻滅した兵士」の描き方の違いを論じ、Hemingway がより個性を重要視した具象的なスタイルであるのに対し、Faulkner はより個性を超越した抽象的なスタイルであると結論付けた。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

山本 裕子「フォークナーのドラマトゥルギー 『操り人形』から『尼僧への鎮魂歌』へ」(日本アメリカ演劇学会)30号、2019、47-65. 査読有

Yamamoto, Yuko. “‘This Problem Doesn’t Exist in Your Country’: Teaching Faulkner’s Light in August in Japan.” *Teaching Faulkner Newsletter*, vol. 36, 2019, Internet Journal. 査読無

山本 裕子「移動性の法則—スノーパス三部作と地理的想像力—」『フォークナー』(日本ウィリアム・フォークナー協会)19号、2017、39-59. 査読無

山本 裕子「『失われた世代』の戦争神話—Faulkner , *Soldiers’ Pay*, 戦後印刷文化—」『アメリカ文学研究』(日本アメリカ文学会)53号、2017、21-35. 査読有

Yamamoto, Yuko. “Re-forming the Globe: Citizenship Reconfigured in Joy Kogawa’s *Obasan*.” 『大学院研究プロジェクト報告書』(千葉大学大学院人文社会科学研究所)第318集、2017、48-61. 査読無

山本 裕子「戦争と記憶のアメリカン・シアター - 兵士の帰還と『兵士の報酬』 - 」『人文研究』(千葉大学文学部)45号、2016、33-54. 査読無

[学会発表](計10件)

Yamamoto, Yuko. “‘The Family of Man’: William Faulkner and Public Diplomacy in Postwar Japan.” Faulkner and Yoknapatawpha Conference, 2019.

山本 裕子「ヘミングウェイとフォークナーの帰還兵—「兵士の帰還」と『兵士の報酬』における戦後小説スタイル」日本ヘミングウェイ協会、2019.

Yamamoto, Yuko. “When Faulkner Was in *Vogue*: Modernism and Women’s Magazine at the Midcentury.” International Conference LERMA (Laboratoire d’Etudes et de Recherche sur le Monde Anglophone), 2018.

Yamamoto, Yuko. “Hemingway and Faulkner at War: On Homecoming and the Persona of a Wounded Soldier.” International Hemingway Conference, 2018.

Yamamoto, Yuko. “On Common Ground: The Cartographic Imagination of William Faulkner and Walker Evans.” The Cartographic Imagination Conference, 2018.

山本 裕子「A Failed Dramatist? —初期習作から *Requiem for A Nun* へ—」日本アメリカ演劇学会、2017 .

山本 裕子「英語教育と専門教育の架橋をめざして—CLIL 理論によるカリキュラム策定と授業実践」日本英文学会関東支部夏季大会、2017 .

山本 裕子「ハヴァナからキーウエストへ—ヘミングウェイの「片道航海」とエヴァンズのキューバ写真」日本ヘミングウェイ協会全国大会、2016 .

Yamamoto, Yuko. “From Hemingway to Faulkner via Evans.” Faulkner and Hemingway Conference, 2016.

山本 裕子「移動性の法則—スノーパス三部作と地理的想像力—」日本ウィリアム・フォ

ークナー協会全国大会、2016 .

〔図書〕(計3件)

Yamamoto, Yuko. “From Hemingway to Faulkner via Evans: ‘One Trip Across,’ ‘Sepulture South,’ and the Visual Aesthetics of Writing.” *Faulkner and Hemingway* (Eds. Christopher Rieger and Andy Leiter), Southeast Missouri State UP, 2018. 査読有

山本 裕子(他17名14番目)「アメリカン・ドリームの申し子—フレム・スノープスと五〇年代のフォークナー—」『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』(貴志雅之編) 金星堂、2018、386(271-88) . 査読無し

山本 裕子(他8名8番目)「フォークナーのレイト・スタイル—後期作品におけるメモワール形式と老いのペルソナ—」『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』(金澤哲編) 松籟社、2016、265(215-37). 査読無し

6 . 研究組織